

父の育児休暇と子育て生態学 父の適応できるのか？ ～フィールドエピソードと生態系サービス～

佐々木宏展 (親バカ連絡協議会)

はじめに

ひとびとが自然と接する「経験の消失」(自然離れ)が増加している(国立青少年教育振興機構 2010)。結果として、1) 人々の健康や生活の質を害すること、2) 自然に対する興味や関心、保全意識を大きく衰退させること、3) 現状のままでは社会の自然離れが今後もより一層と進んでいく恐れがあることが指摘されている(Soga 2016)。これらの課題の解決のためには、行政、地域住民、教育機関など幅広い関係者の連携が不可欠であり、子育て中の保護者もまた無関係ではないことは言うまでもない。

教育の中でも、家庭教育はすべての教育の出発点である。(東京都生涯学習審議会 2007)。保護者は、外界と媒介する初めての他者として出生から就学までの間、自然とのかかわりを促す中心的な役割を担う。しかしながら、現実的な問題点として、保護者の行動圏内における自然環境の不在、共働きの増加、急激な都市化・娯楽の変化など、日常的な自然とのかかわりを促すことは、困難であることが多い。これらの家庭教育における困難さを改善するためには、母親中心になりがちであった子育てから、育児休暇などの制度を利用した父親の積極的な育児参加や、保育の充実が求められている。

子育てにおいて、父親が参画する理由のひとつに、母親と得意な役割の違いが挙げられる。例えば、父親の役割は、母親が本能的に安全に配慮して子供に接するのに対して、普段触れることのない環境での経験で、世界・外界との接点を学んだり、挑戦する楽しさを伝えることがあげられる(子育てハック <https://192abc.com/73266> 12月28日20時現在確認)。また、安西(2011)は、環境という漠然としたものを保全する場合を考えると、環境に身を置き、体験を通してさまざまな現象に関心をもつことが大切であることを指摘している。河川や森林・草原などの日常で触れにくくなった生態系などの自然との関わりを媒介し、体験を通して自然に対する興味・関心・保全意識を育むうえで、今日的に父親に求められる役割はますます高まっていると言える。

多様な生態系において、とくに人間がその恩恵を受けているものを生態系サービスと呼んでいる。生態系サービスは、主として、基盤・供給・調整・文化の4つの機能に分類されており、例にもれず、子育ての際にも、多大な利益をうけている。そこで、本報では、育児休暇を取得した著者が、子育てをする中で育児に適応していくプロセスをエピソードベースで記述する。また、この期間を通して、他者の学びとは何か。人と自然の関わりにおける経験とは何かを考える契機としたい。

離乳食ひとつとっても・・・(4月15日 ※日付はすべて2016年)

離乳食ひとつとっても奥が深い。今日の朝のメニューは、納豆ひじきとコーンライス。離乳食をあげるのは日課になりつつある。この日課の中でも、面白いのが、物言わぬ想いを読み取ること。どのメニューが好きで、どのメニューがいまいちで、どのタイミングで食べることに飽きているかということが態度・表情・口をあける勢い等でなんとなくわかるようになってくる。日課を経験して、嫁がすごいと思うのは、この離乳食を食べ飽きたあたりからの対応である。自分が食べる真似をしてみたり、声のトーンを上げてみたり、褒めまくったりして、必要な分量のご飯を食べさせる。僕はというと、スプーン一杯にのせる量



が多めなのか嘔吐く。しかし、反省して少なめにすると、食べることに飽きる。たまに早く帰って離乳食をさくさくとあげる嫁。こんなトライアンドエラーを繰り返していたんですね。何か家では嫁が圧倒的に「先生～！！」ですね。参観のイメージですね。最近の娘は、手を前に出してタッチを求めます！

11ヶ月の娘の見分ける力 オオイヌフグリを見分けている？！(4月16日)

長野県須坂市の百々川河川敷でお花見。長野県の須坂市百々川ではまだまだ桜が咲いていて、楽しめる状態。ピクニックでご飯を食べた後に、河川敷の芝生に直接座らせてみる。すると、最初は、足の裏がチクチクする感覚に違和感を感じたのか、少し足を上げてみたり、なんとも言えない表情を浮かべていた。少し時間が経つと、慣れてきたみたいで軽快にハイハイをする。ちょっと離れて名前を呼ぶと、途中ちくちくする手を確認しながら親にたどり着く。オオイヌフグリが満開のところで、親がつんでみせると、ゆっくりと青い花のところに指がいく。他にヒメオドリコソウやタンポポがある中で、オオイヌフグリをつまんでいるところを見ると、ちゃんと識別してるのがわかる。赤ちゃん視力は、あまり良くないと育児本に書いていたが、物を区別する能力は別ということになる。そのあと、雑草まみれになりながら、落ち葉を拾ったり、ちぎったり、食べたり(笑)、していましたが、やめさせずに観察していました。嫁が車に乗せる際、今日初めて落ち葉食べたね～なんて言っているのを聞いて、すごい！！と思った今日でした。笑



大人が見せたいと思うものと、子どもが見たい・つかみたいと思うものはずれる たくさんの対象から選ぶのは？(4月24日 高山村七色温泉)

この写真を見て大人が「ある」と思うのは、間違いなくスマイルです。僕も、娘にスマイルが「ある」と認識させたいので、触らせようと、体ごと近づけてやりました。きれいな～なんて声かけをしながら、お花を眺めていると……。そ～。手を伸ばして～。とったのは枯葉！前回のピクニックのときの記憶があったのかな？大人が見せたいと思うものと、子どもが見たい・つかみたいと思うものはずれることもある。確かに、ちゃんと見れば、枯葉もあって、ササもあって、アリなんかもいて、対象なんて山ほどある。大人が見せたいと思うものに焦点を絞ると、娘が興味をもっているものを見失うこと場合もあると思うと、はっとさせられた瞬間でした。まあ、いじって、ちぎって、味見したいただけだと思いますが！(笑) 子どもが「ある」とおもっているものを、じっと観てみることも大切ですね。



こっちが、ねらっているからこそ、そのずれが面白いと思えるのでしょうか。ねらいのズレを楽しむぐらいの余裕をもって、自然と関わることが大切かもしれませんね。

触ること(4月25日)

触らせることは、勇気のいること。地面に落ちている葉を食べているとき待てるか。桜を触ってちぎっているときに待てるか。笹を持っているときに、じっと待ってやれるか。だいたいいろんな家にはないものを触っているとき、即座にはたらく思考は、「危ないね〜」とあって、遠ざけます。たしかに、笹は手を切るリスクがあるでしょう。桜でも、何かあるかもしれません。落ち葉でも、トゲトゲしていたら、喉に刺さるかも。たくさん、リスクがあります。

これらの理屈をきくと確かにその通りと思います。一方で、少し我慢して、見ていると、ちぎったり、眺めたり、なめたりしている姿を見て、大人の理屈でこれを阻害することは、もったいないとも思います。大人が考えるリスクは確かにその通りです。けど、そのリスクを考えることができるようになった経験のプロセスこそ大事なのではと最近をよく考えます。

嫁とも、最近そんな育児の話をして。嫁とも、完全な一致は望めない。けど、散歩しながらも、考えをすり合わせる。これは究極防災にも関係すると思っています。



保育園で神社を利用—人工知能と場所と遊び—(5月13日)

対象との関わりかたひとつとっても多様。学び方も多用という話。最近はずくづく考えるということが、自分の所属しているところに規定されて、物事を考えていたんだということに気づかされます。これも育休効果ですね。嫁の姉に自転車を借りて、ふと吉田神社という場所を見ると、幼稚園？保育園？の子らがいるではないですか。これも、普段の行動範囲内では、見ることのできない光景。お参りをしがてら、子どもらを見渡すと、本当に遊び方が多用。どうしても、自分は足下の草本とこどもの関わりに目が行くのですが、その草本との関わりひとつとっても、多様。四つ葉のクローバーを探すもの、ただひたすらひとりで果実をつみ続けること。とったものをお友達にプレゼントしているもの、木の木陰で、根元を見ているもの。本当に面白かった。この状況で、もし調べるものを絞ったら間違いなく面白くなってしまふ。

しかし、自戒もこめていうと、教室では、対象も決まっているし、学ぶ順番が決まっている。こういうことの『ずれ』に真面目に悩んでしまふ。きっと、学ぶ方法も、学ぶ対象も、ひとりで草本をみるのか、みんなで探したいのか、自分で決めたいだろうなと思ってしまふ。3歳でこれなんだから、大人ができることは場を設えることなんだろうと思う。川という生態系には、つれていくことができるが、そこでの対象の発見はさまざまだよなと思ってしまふ。話は戻って、足下の自然との関わりをさらにひいてみると、この場での遊び方はもっと多様になる。神社で拝んで見るもの、走り回るもの、走っていたけど、気になる子が草つみをしていたので、自分も草つみに変えた子。大きく分けると、人と人が関わっているのと、人と自然(足下の草本)



の関わりの空間を見ることができる。もっともっと人と人の関わる力はスポーツ的で、人と自然の最前線は農業的なのかな？そんなそれぞれの世界がこの場所のように連続的であればいいのになという事を考えていた。写真は幼稚園の子にもらった植物。外来種だろうけど、これまた違った価値がある！笑 文科省も人工知能ででんととっています、こんな時だからこそ、遊びや郷土や風土で育まれる能力をちゃんと考えたいですね。

昭和の森公園にて(5月20日)

芝の上で、ハイハイ慣れてくると、呼びかける声に反応するも、芝生を摘んでみたり、枝をもってみたり、通りがかりの人に手を振ってみたり、手拍子してみたり、とにかく色々します。狭い家ではなかなか見ることのできない反応を見ることができます。納得のいくまでハイハイをさせ、つまんでじ〜っと見るのも、案外家の方がダメなものが多く、「だ〜め」と、中断させてしまいがちなので、納得のいくまでやらせてる時間をとってやりたいなと思う今日この頃でした。

最後の写真は、枝を届けてくれました。ありがたや。



八方尾根 ゴンドラ降りて(8月12日)

ゴンドラに乗って、リフトに乗って降りたところにとっても景色が綺麗な場所があります。娘は絶景よりも、足元の石に興味があるのか、じ〜と見て、拾って、「はいっ！」と、石ころをくれます。大きいのは、嫌なのか、かなり小さな石ころをつまんでくれます。(笑) 気をぬくと、パクッと食べるので、目を離せないのですが、探ったり、いじったり、眺めたりしているのがとっても面白い。ハッポウアザミが生えていたので、この石も蛇紋岩地帯なのかな？ ちゃんと調べねば。



そして、八方尾根 北尾根高原へ

八方尾根の帰りに、温泉に寄ろうということで、北尾根高原というところに行ってきました。友達から長野は地質と植生がダイナミックに変わるおもしろい場所と聞いていたので、どのへんかな？ぐらいいに思っていたのですが、なんと、八方尾根がまさにそうだったんです！ハッポウアザミ (*Cirsium happoense*)。この北尾根高原で、八方尾根開発の方々が、自然植物園を維持管理するための手入れをしていて、そこでこの八方尾根の面白さを伺うことができました。八方尾根は、蛇紋岩地帯があり、ここは貧栄養になるそうです。このハッポウアザミは、この蛇紋岩地帯に分布しており、上部の非蛇紋岩地帯では、タテヤマアザミが生息しているそうです。

地質の違いがどれほど遺伝子に影響を与えているのか。形態が違って、同じということもあるだろうし、別種だったものが、遺伝子をみたら同種ということもあるだろうし、長野は地質と生物学の境界はかなり面白そうですね。

おわりに

この育児休暇の期間を通して、いかに他者の学びを自分の認識の枠組みのみで捉えているかということに気づかされる。当初は、「これを見せてやろう!!あれを見せてやろう!!」という想いでいっぱいであったが、大人側の意図を捨てて、自分の子どもを見てみると、実にいろいろなことを発見し、気づいていることに気づく。石・アリ・ハナビラ・カレハ・エダ etc・・・。観察することの重要性に気づかされる。

今、社会では、分野の枠を越えて、多様な関わりを促す動きが各所で見られる。育児休暇という制度を利用して家庭という枠でどっぷりと学んでみるのはいかがだろうか？

キーワード 生物多様性 保育 育児休暇 観察 生態系サービス

参考文献

- Soga M, Gaston KJ (2016) Extinction of experience: the loss of human-nature interactions. *Frontiers in Ecology and the Environment*. 14: 94-101.
- 安西祐一郎 (2011) 心と脳 - 認知科学入門. 岩波新書
- 河合雅雄 (1990) 子どもと自然. 岩波新書
- 無藤隆 (2008) 理科大好き!の子どもを育てる-心理学・脳科学者からの提言. 北大路書房
- 鈴木宏昭 (2006) 知性の創発と起源 (知の科学) - 人工知能学会
- 斎藤公子 (2007) 生物の進化に学ぶ乳幼児期の子育て. かもがわ出版
- 三崎隆 (2010) 『学び合い』入門. 大学教育出版
- 佐伯胖 (2004) 「遊ぶ」ということの意味「わかり方」の探求 思索と行動の原点. 小学館
- ジル・ドゥルーズ (2007) 差異と反復 (上) 財津理訳 (河出文庫)